

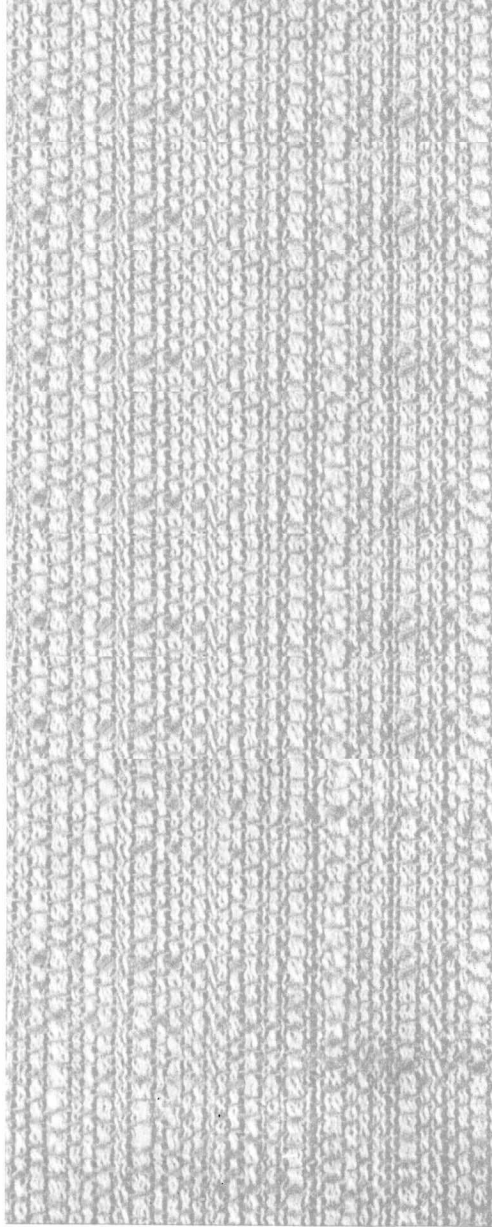
宮本百合子選集

第三卷

宮本百合子選集

第三卷

新日本出版社



宮本百合子選集 第三卷

1968年9月30日 初 版

1974年7月10日 第8刷

著 者 宮 本 百 合 子

発行者 松 宮 龍 起

郵便番号 102 東京都千代田区富士見 2 の13 の14

発 行 所 株 式 会 社 新 日 本 出 版 社

電話 東京 (265) 7 0 0 6 (営業)

(265) 2 0 7 5 (編集)

振替番号 東京 1 3 6 8 1

印刷・鎌倉印刷株式会社 製本・古賀製本株式会社

落丁・乱丁本はおとりかいたします

目次

一九三二年の春	3
刻々	33
小祝の一家	85
鏡餅	107
鈍根録	119
乳房	127
雑沓	165
海流	199
道づれ	247
猫車	277

その年	301
杉垣	321
おもかげ	343
広場	357
三月の第四日曜日	379
朝の風	409
注	431
解説	435
佐藤静夫	435
戸台俊一	455
解題	455

一九三二年の春

一

三月二十九日の朝、私は塩尻駅前の古風な宿屋で目をさました。雪が降っていた。この辺では、宿屋などは夜じゅう雨戸をしめず、炬燵のある部屋の障子をあけると、もういきなり雪がさかんに降っている内庭が眺められる。松の枝にも雪を見ながら朝飯をしまつて、わたしはたった一つの荷物の小カバンを片手に下げ、外套の襟を高くとって雪の中を駆けてステーションへ行つた。宿屋は駅からそんなに近いのであった。宿屋の主人が差さない傘を手にもつてやはり後から駆けて来、汽車が動き出したとき、

「じゃ失敬します、また来て下さい」

と右手にすばめたままもっている傘をふって挨拶した。この人は宿屋をしているが、塩尻町の全農に関係し、作家同盟*から出ている文学新聞なども読んでいた。前日塩尻町に講演会があり、そこへ自分も来ていたのだ。下諏訪までゆく三等の汽車の窓から、雪ふりの山々が近く見える。一面白く雪が積り、黒く樹木の

見える信州の山は、自分にハバロフスク辺の鉄道沿線の風景を思い出させた。

モスクワから帰って来る時、丁度こんな風にたえ間なく雪が降り、黒い木が猪の背中の毛のように見える沿海州の山の間を通過するシベリア鉄道の車室で、わたしはタイプライターをうっていた。宮本とまたハバロフスクの雪のふる山の間をシベリア鉄道で何日も乗って行つて見たい心持がしきりにした。

下諏訪には製糸女工さんを中心とする文学サークルがある。三月初旬に、作家同盟から江口渙その他三人の講演団が行つて、非常に愉快な講演会をもった。文学サークルの製糸女工さんが動員され、文学新聞に出ていた「セリブレン」という短篇小説を上手に実感をもつて読んで喝采を博したという興味のある事実もあった。その時、わたしは皆と一緒に行けなかったのだ。塩尻まで来たついでに、サークルの人々に会って帰ろうと思ったのであった。ステーションにサークルの世話役の人が出迎えてくれ、牛肉屋をやっている〇〇君の店へ行ったら、そこは下諏訪警察の近くだし、「ここじゃあないよ。大通りから右へあっちを廻って

と云つたろう？」と云うことだった。今度は番傘をさして雪の中を案内の人について、諏訪神社近くの大きい料理屋へ行った。廊下をいく曲りかしたところにドアつきの小部屋がある。西洋風に壁で一方だけに窓がひらき、大炬燵がきつてある。そういう部屋に落着くと、すぐ〇〇君がやって来て「ここは私の同情者でしてね、重宝ですよ」と笑った。

サークルの女工さん達は七八人だが、職場の都合で夜七時頃にしか集れないという話であつた。寄宿にしている人は門限九時までで、僅かしかおれないから残念がつているそうだ。大体下諏訪の製糸工場は大きいのが少く、女工さんも県内の出身が多く、通勤も相当あるので、文学サークルなども作れる。しかし文学サークルなど企業の内部へ——工場寄宿舎の内へどんどん拡大してゆくことは相当困難である。どうしても、文学新聞や「働く婦人」を中心として、進歩的な生活気分をもっている女工さんは、工場の外で集り、企業のそとでサークルを持つ傾向がある。しかし、〇〇製糸工場を中心とする下諏訪のサークルに属する女工さんたちは活潑で、この前の作家同盟講演会の後、主催者で

あつた青年団と町役場との間に問題がおこつた。作家同盟の誰だったかの話が、帝国主義侵略戦争反対にふれて中止をくい、一時講演者が検束された。それを口実に、町会の反動分子が自主的的青年団に抗議を申込み、以来ああいう不埒な講演会をすることはならん、役員は引責辞職しろ、さもなければ年二百円の補助費を廃止する、とねじ込まれ、男子青年団の方は、かけて辞職し、反動にヘゲモニーをとられてしまった。ところが、共同主催者であつた女子青年団の方では、悪い講演会であつたとは思わぬという役員の決議で、辞職を承認せず、今もがんばっているという〇〇君の話であつた。女子青年団の方では役員の八分が工場の女工さんで、ほとんどサークル員でしめられているというのは興味あることだった。

〇〇君は自身、評議会時代から階級的闘士として立つ以前、製糸工場で「見番」をやっていた経験がある。私に製糸工場の組織を図解して説明してくれた。長野県だけでもおよそ九万人の婦人労働者がいる。もちろん繊維がおもなのだが、製糸工場の組織をみてわたしは、それがどんなに女工を搾取するためにだけ耻なく

仕組まれているかということを感じた。経営の内部にどんなことがあるうとも、女工が参与し得ないように組織されている。春になると、勧誘員に山の奥から二十人三十人と束にして、若い貧農の娘たちがつれて来られる。彼女たちはそのまま寄宿舎へしめ込まれ、九時間労働でしぼられ、用がなくなると、また勧誘員に追いたてられつつ故郷へと一団になって戻ってゆく。来年は、そのときまた改めて契約される。慢性的な季節労働の性質と全然産業奴隸的な悪条件のために、製糸女工の水準は最も低いところにのこされているのである。

「奴等はなかなかうまく考えていますからね、女工さんたちに、毎月現金で賃銀を全部わたすようなことは決してやらない。帳面を一人一人に渡しておいて、字面で書き込むだけ。小づかいには五十銭、一円と借出しの形式にしておくんです。何ヵ月か働いた賃銀は、勧誘員が女工さんたちをつれて村へかえた時、帳面と合わせて親に渡す。ですから、実質的な賃銀不払いが雑作なくできるんです。その時になって見るまでわからないし、いよいよ不払いとわかって腹を立てても、

とうに工場からは出て、ちりぢりになっているからストライキも出来ない。来年働けば、もらえんと思つて、ずるずるに、また契約をするというわけです。——今年は何といね、養成工は十五銭になるやならずだからね」

日本のプロレタリア文学は、紡績産業の婦人労働者の問題をとりあげている。窪川いね子にいくつかの作品がある。けれども、生糸製糸の婦人労働者のもっと劣悪な労働条件と困難な闘争については現実があるように大規模な構図をもつては、プロレタリア文学の中に十分、まだとり扱われていない。安瀬利八郎の短篇があるに過ぎない。

「——いささかここにも立ちおくれがあると云えるかも知れませんか」

とわたしは笑った。〇〇君はむかいあって炬燵にあたり、茶うけの香のものをつまみながら、

「一つ『生糸』を書きなさい。大いに後援しますよ」と云った。

「サークルで組織的に書くことはまだ出来ませんか？」

「そこまでは行っていないね。——だが、正直なところ、私はこの頃になってやっとプロレタリア文化運動のねうちが分りましたね。サークルというものはいいいね。何にでもつかえる。やって見て実際驚いた。作家同盟でも、これまで大衆化の問題では、いろいろの経験をやったらしいけれどもサークル活動で本ものになりましたね」

一九三一年の大会を通じて作家同盟は文学サークルを企業・農村のうちに組織する仕事をはじめた。音楽家同盟、演劇同盟、美術家同盟なども同じ活動を開始し、解放運動における政治闘争・経済闘争・文化闘争との間に必然的にある有機的な統一と、差別とがマルクス主義の立場からしっかり把握され、実践されはじめた。これは、日本の階級闘争の画期的進展をしめすものであるし、同時にプロレタリア作家の階級的質を目にみえて向上させている。(作家同盟のサークル員は全国で四千五百名ある。東京、千四百三十八人中、婦人サークル員は百四十五人いる。)

雪は午後になっても降りつづけている。I君が、自転車でもう一ぺんサークル員のところを動員にまわる

と云って出かけた。I君は二十歳ばかりの青年だが、岩波書店のストライキで首切られ、下諏訪へかえって来てから〇〇君といっしょにサークルの仕事を積極的にやっているのだ。ふと〇〇君が、

「あなた、平田良衛君を知っていますか？」と私にきいた。

「知っています。……どうしたの？」

「つかまりましたね」

「ほんと？ いっ？」

「知らないんですか、きのうの新聞に出ていましたよ。小川君、野村さんという人、窪川鶴次郎もやられた」

「その新聞ありますか、あったら見せて下さいな」

わたしは三月二十八日の黎明に東京を立つて塩尻へ来た。その日の新聞は見落しているのであつた。女中が持ってきた東京朝日新聞を見ると、三段ぬきの見出しで、プロレタリア科学研究所の山田勝次郎、平田良衛、野村二郎、寺島一夫、河野重弘等の同志たちが検挙されたこと、同時に、日本プロレタリア文化聯盟書記長小川信一の家で書記窪川鶴次郎、出版所長壺井繁治がやられたことが報道されている。

文化聯盟の正体曝露というふうに、日本共産党と結びつけ、正式の黨員であることを承認したとか煽情的に書かれている。山田勝次郎の兄、社会ファシストが、そういう活動をする弟をもつことにたいして遺憾の意をあらわしている（！）。日本プロレタリア文化聯盟にたいする反動支配階級の恐怖は、そもそも一九三一年の秋、聯盟結成の当初から顕著であった。それぞれ合法的な大衆文化団体、作家同盟、音楽家同盟、演劇同盟、美術家同盟等の十三団体を綜合的活動体として日本プロレタリア文化聯盟を結成したものであるのに、官憲はその結成を承認しない。中央協議会を解散をもつて威脅する。

大衆的啓蒙雑誌「大衆の友」「働く婦人」などは毎号発禁つづきであった。それらの雑誌が文化聯盟から出ているというだけが、発禁の理由である。封建的絶対主義日本帝国主義は、日本プロレタリア文化聯盟結成と前後して満蒙侵略中国再分割の戦争を開始している。この侵略戦争は満、国のお手盛建設でおわる性質のものではなく、ソヴェト同盟への侵略と第二次帝国主義世界戦争へのくち火であることは十分あきらかで

ある。しかも、列強ブルジョアジーの計画する第二次世界戦争は、彼らにとっては、不利な諸条件をもっている。社会主義国家ソヴェト同盟の確立と五カ年計画の成功。そして、インド、アフリカ、ラテン・アメリカ等植民地大衆は、今日第一次世界戦争の時のように従順に、帝国主義戦争の龐大な予備軍として利用され殺戮されることはがえんじないだろう。大衆の革命的組織は国際的に存在している。ヨーロッパ諸国の勤労大衆は、すでに、それぞれ革命の経験をもっている。これらのいわゆる「内憂」が各資本主義間の利害の対立と微妙に絡んでいるのである。

第二次帝国主義戦争は世界階級戦である。封建的資本主義国日本はこの戦争において、東洋における帝国主義の番犬をつとめつつある。日本プロレタリア文化聯盟は文化活動を通じてつねに正々堂々と日本の勤労大衆が現在経験しつつある政治的経験の深刻な階級的意味を啓蒙し、専制と恐慌、帝国主義戦争の重圧からの抜道はプロレタリアにとって何処にあるかということとを明らかにしてきている。弾圧はけっして無力な階級的組織に向って下されるものではないのである。

炬燵の上に新聞をひろげて更にながめ、わたしはこの暴庄がどの位の範囲まで拡大するものか、或は終熄するものか見当がつかなかった。〇〇君は單純にまた例の意地わるが始ったというぐらゐに理解している。

「やりますねえ」

と云って、炬燵の向い側から同じ新聞をのぞいている。けれども、記事はわたしの心持に何かもつと重い余韻をのこした。身重な窪川いね子が小さいふくさ包みをもって上落合の作家同盟の事務所の横にポンプ井戸があるそのわきを歩いていた姿を思ひうかべた。七時頃、若々しい中形模様の着物をきたサークル員の女工さんがやって来るまで、わたしはなお一二度、新聞をとりあげて見なおした。

二人・五人・七人。男女サークル員がだんだんやって来てその炬燵のある和洋折衷の室はやがて一杯にしまった。この前の講演会の結果からはじまって、女工さんたちの方が男のひとたちより元気にしゃべった。頬を上気させ、しかし手は行儀よく炬燵布団の下に入れたまま。

「そんなこと——嘘ずら！」

「誰が出すもんか。——誰が云ったの？」

「坂田が来たんだって」

「ふーん」

女工さんたちが幹事をしている女子青年団ががっちりしているの、町会は、下諏訪町にあるもぐりの小新聞の主筆をつかつて、組織がえをすれば年に百五十円とか補助金を出すと持ち込んで来ているのだそうだった。

「わたし達が役員に当選したら、先の女子青年団長が泣いてやめてしまったんです」

「なぜ泣いたんです？」

「え？ 工場へなんぞ出る人と一緒にされてはたまらないんだって」

女工さんはみんな眼を輝やかせ、凝っと胸をはってすわり、仲間の一人が何かいうとそれを注意ぶかくきき、彼女らの云いたい言葉が云われた時にはつよく賛意をしめし、愉快そうにこだわりなく笑う。自信のあるみんなの物ごしが自分に感銘をあたえた。ソヴェト同盟にいた頃、よく工場で婦人労働者たちの間にまじり、しゃべった。そのわかい婦人労働者たちがしめ

したと同じ性質の注意力、知識欲、階級闘争の実践への吸収力を下諏訪の文学サークルの女工さん達から感じたのであった。彼女らの実質的な明るさは注目に値した。

「働く婦人」はこのサークルでも好評で、重宝ノートなども実際の役に立てられていることがわかった。たとえば自分の袖口にリボンをつけて切れるのをふせぐという狭い範囲での利用ばかりでなく、一人の女工さんがそんな細工をしていると、ふらりと来かかった他の一人が「何しているの」というようなことになり、「それはこの雑誌に出ているのよ」と「働く婦人」が見せられる。そんな工合に利用されるのであった。サークルからニュースを出すことがそこで決定され、「働く婦人」への通信員も婦人から二人きめられた。今日は、下諏訪から満洲へ出征させられて戦死した兵士の遺骨が到着したので、青年団の連中は停車場前の奉迎に強制動員されたのだそうだ。

「ここへ来るまえ塩尻が本籍地だって云うのもう一度そっちで奉迎やって来たずら。骨をわけて持って来て、またこっちで奉迎だ。雪っぶりに傘もささせぬ。」

新規の羽織だいな、ずら」

「ほかばかしそうな口ぶりで農民の△君が話した。」

「どうだ？ 女子の方も行ったかね？」

「行くもんんで！ 話して来ないもん」

それから、みんな砂糖豆をたべながら、サークル員がこしらえた「職場の歌」をうたった。「トラム」の歌もうたった。初め一つの歌を大きい声でそろって歌ったら、そとは雪の夜だのに温くなっているいい心持になって、もう一つ、もう一つと歌った。しまいに暑がって×子が立って窓をあけた。

その夜、十一時すぎの上りで自分は東京へむかった。新宿へ降りたのは省電の初発が出てまだ間のない早朝であった。駅のプラットフォームのまだどこやら寒く重たい軒のかなたに東雲がみえた。東京の夜があけて間もないらしい。ポロ円タクで走っているうちにだんだん家が気になりだした。角の交番を曲ったところから五十銭だまを握っていて止るとすぐ降り、家までの横丁をいそいで歩いて玄関をあけようとしたら閉まっている。戸があいてまだ寝間着の家のものの顔が出るとすぐきいた。

「宮本さんは？」

「いらっしやいます」

それで安心して、のろのろ顔を洗っているところへ宮本が降りて来た。

「どうだった？」

「よかったわ、行って……」

しばらく黙っていて、彼はやがて、

「——よく帰って来たね」

といった。

日本プロレタリア作家同盟は三月十五・六・七と三日間にわたって第五回大会を開くことになっていた。常任中央委員会から出される報告の一部として、婦人委員会の報告、議案が書かれなければならない、その執筆者は、窪川いね子と自分とに決定されていた。婦人委員会は、作家同盟内の婦人作家の世界観と技術とをたかめ、優秀なプロレタリア婦人作家として成長するため役に立てるばかりでなく、作家同盟が一九三一年からのいちじるしい文学活動の発展として拡大したサークル活動に独自の積極性で参加し、企業・農村における勤労婦人の文学的自発性を鼓舞・指導し、プロレタ

リア文学の影響のもとに組織する任務をもっている。一九二九年の世界経済恐慌以来、日本の農村と都会との勤労婦人は、労働条件の悪化、日常生活の困窮化によって急速なテンポで階級性に目ざめつつある。これらの勤労婦人たちが、解放にむかって闘う階級の半身として熱烈に現実生活の細部で行っている闘争の実践、そのいろいろな姿はくまなく日本プロレタリア文学の中に活かされなければならない。同時に、そういう勤労婦人たちが、工場の職場、寄宿舎の片すみ、あるいは村の農家の納戸などの奥で鉛筆をながい間かかって運びながら丹念に書く通信、小説は、たとえ現在では片々として未熟なものであろうと、大胆にプロレタリア文学の未来の苗床として包括されて行かなければならない。下手であらうとも、それらの文章はまず勤労婦人達が自分たちの毎日の生活を通じて階級的な主張を表現してゆく画期的な端緒であり、それこそ正しい階級の武器としてのプロレタリア文学の萌芽である。そしてまたそれはいつも下手であるとは決していない。主題は自ら階級的見地で扱われている、ある場合はひどく上手でさえあるのだ。こんなに真に創造的な婦人

作家を生み得る可能をもった階級は、崩壊にむかうブルジョア・インテリゲンツィア層ではない。新社会の建設にむかって抬頭するプロレタリア・農民層である。下諏訪の女工さん達の文学サークルの活動ぶりなどは、この事実を雄弁に語っている。

下諏訪のサークルから三月三十日に帰京し、その次の日であったか自分は下十条へ出かけた。窪川いね子は数年来下十条に住んでいた。三月二十五日頃、日本プロレタリア文化聯盟の關係で検束された窪川鶴次郎はまだ帰らず、出産がさし迫っているいね子は風邪で動けないという話である。

二階へのぼってゆくと、もう数人作家同盟の婦人作家たちが来ている。いね子は床の間より敷いた床の上にどてらを羽織って半身起きあがり、顔を見るなり、「ああ、よく来てくれました」と云った。

「どうなの？」

「もう大抵いいんだけど、ひどい熱が出ちまって、こないだ雨の中をビシャビシャに濡れて歩いたもんだから……」

「窪川さんは？ 出られるの？」

「出られるんじゃないかしら。きつと虱だらけになつて来ると思つて、ちゃんと着物を用意しているんだけれど……こないだ行つて親子丼をたべさせて来た」

妊娠のためにやつれ、また風邪でやつれながら、窪川いね子は持ち前の落着きとかすかなユーモアを失わずおいしいお茶を入れてくれた。

「戸台さんがゆうべから帰らないのよ。どうしちやつたのかしら……」

同志戸台は日本プロレタリア文化聯盟で働いている。大体「コップ」に対する官憲の妨害は書記長や同志窪川が捕えられた時に始つたのではなかった。ほとんど今年のはじめから、絶えず書記局は襲われ、一人や二人、短期の犠牲者は順ぐりであつた。それと闘つてやつて来ていたのだが、昨夜からまた戸台の帰らない事實は皆をやや不安にした。二十八日にブルジョア新聞が発表した「コップ」への暴圧が、逆宣傳的に報道された範圍には止まっていず、沈黙のうちに、陰険に各参加団体内部へと拡大されて行っていることが感じられた。

わたしたちはアンパンをたべながら、婦人委員会の報告、議案の内容について打合わせをした。婦人委員会の一般的任務、組織活動、創作活動について報告し、議案としては、満蒙における日本帝国主義侵略戦争以来激化したファシズム、社会ファシズム文化・文学に対する、婦人の独自の抗争の問題、植民地被圧迫民族婦人にむかっけての積極的働きかけの問題などが課題とされた。

手帳へそれらを箇条書きにしていると、きつとくちを結ぶようにしてそれを見ていた窪川いね子が、急に、

「ねえ、私もう、いやんなっちゃった」と云った。「親父がどうも気が変になったらしいのよ」

彼女の父親は大森に住んで電燈会社だけに勤めていた。わたしにはすぐ彼女の心持がわかった。夫は敵にうばわれ、出産を目前にひかえている彼女が、そのことにも責任を負ってやらなければならぬ立場にあるのだった。

「……中気なの？」

「早発性痴呆とかいうんじゃないかしら……私の風邪

もそのおかげでなのよ。帝大病院へつれて行ったんだけれど、電車を降りてずっと歩き出すとそのまんまどこまででも真直に行っちゃまうんですもの。——傘をひろげると、すぼめることが分らなくなるんですもの……とても骨を折っちゃった」

「会社の方はどのくらい休めるの？」

「今は欠勤だけでも、どうせもう駄目だわ」

「そんなに遊んだことがあるのかしら……」

第一次世界戦争が終り、日本に気ちがい景気があった頃、彼女の父親は丁度妻を失った時であった。気ちがい景気のいく分のおこぼれにあずかり、彼も小市民らしい遊蕩をやった。相当ひどくやって、九年の恐慌とともに、その放埒は終結したが、今その不運な成果があらわれたという訳なのであった。

「ね、だからマルキシズムは嘘じゃない！ こんなことにまでもちゃんと日本資本主義発展と崩壊の過程が現われているんだもの」

わたしがひどく力をこめて素朴に云ったので、いね子も笑い出し、

「全くね！」